

提出日 平成 26 年 3 月 27 日

平成25年度総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 (該当に○)	海外共同 ・ 共同研究 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 個人研究	
研究代表者氏名 所属職名	長崎 巖 家政学部 教授	
研究課題名	「近世舶載染織品の実態と日本染織に対する影響の解明」	
研究分担者氏名	所属職名	役割分担
研究期間	平成 25 年 4 月 1 日 ～ 平成 26 年 3 月 31 日	
海外共同研究を実施することになった経緯 (海外共同のみ)		
研究発表(印刷中も含む)雑誌および図書		
長崎巖「瀬戸茶入 銘 八重垣 (江戸時代・17世紀 愛知県立美術館) 付属の仕覆について」『愛知県美術館研究紀要 第20号 木村定三コレクション編 2013年度』 2014年3月28日 刊行予定 愛知芸術文化センター 愛知県美術館		
長崎巖 「作品解説 茶杓袋ほか」『茶道具 -金属工芸・竹工芸を中心に- 木村定三コレクション』 2014年3月28日 刊行予定 愛知芸術文化センター 愛知県美術館		

研究実績の概要（1）

（1）平成 25 年 6 月 16 日から 6 月 18 日にかけて長崎歴史文化博物館・長崎市出島史料館・松浦史料博物館・平戸オランダ商館ほかにおいて舶載染織品の調査を行った。

長崎は桃山時代以来、南蛮貿易の中心地であり、江戸時代初期までは平戸にイギリス商館およびオランダ商館があり、盛んにヨーロッパや東南アジア、中国の物品がもたらされていた。これらのうちには絹製品のほか羊毛製品や木綿製品などが含まれ、その多くが桃山時代から江戸時代初期には戦国武将や大名たちの戦衣に多く用いられていた。

また江戸時代に禁教令が出され鎖国が行われるようになると長崎の出島にオランダ商館が移され、唯一ヨーロッパの品々がもたらされる地となった。いわゆる紅毛貿易であり、実際には東南アジアや中国の物品もオランダ商館を通じて日本にもたらされていた。また唐人町が存在したように中国からも品物の流入はあり、長崎は江戸時代を通じて舶来染織品の主たる流入地であった。

この度の調査では、平戸と長崎に現存している舶来染織品を調べるとともに、それらが当時どのような環境の中で、貿易品として受け入れられ、幕府や業者を介して日本国内に流れていったかを知ることを目指した。その結果、長崎奉行所と京の商人とのかかわりなど、いくつかの知見を得ることができた。

（2）平成 25 年 8 月 8 日から 8 月 9 日にかけて、岩手県盛岡市の、もりおか歴史文化館において、南部家伝来染織品の調査を行った。この調査は岩手県教育委員会文化財課と仙台市博物館からの依頼によって行ったものであるが、もとより本研究と緊密に連化するものである。

調査した南部家伝来の具足下着 2 領のうち、（1）金茶縹子地亀甲革入具足下着は、表地に中国製と考えられる上質な金茶色の縹子、裏地に薄紅色の羽二重を用い、間に革製漆塗り亀甲形の板と鎖を縫い付けた白麻地を真綿で挟んで挿入している。南部家の道具帳である「御宝蔵御甲并御陣御道具類 御判帳」および「御宝蔵 御陣御道具帳」（いずれも文政 11 年（1828）成立）に「亀甲入御下召」として記載された品に該当すると考えられ、制作年代が文政 11 年以前であることがわかる。

（2）黒羅背板地亀甲散模様鎖入具足下着は、表地にヨーロッパ産の黒羅背板、裏地に藍染めの麻地を用い、間に亀甲形の鉄の板金と鎖を藍染めの麻布に縫い付けて挟み込んでいる。縁に菖蒲草の覆輪をめぐらす。洋服の影響を受けて、袖を筒袖とし、襟を立襟とするなど、典型的な幕末期の具足下着の特徴を示している。

平戸や長崎の出島を通じて国内にもたらされた舶載裂が、どのような用途に用いられ、また日本国内でどのように流通していたのかは興味深いテーマである。上記の南部家伝来の具足下着は、長崎からはもっとも遠い地域で使用されている例ともいえ、実際にそれらの制作地が京であるとしても、江戸時代における舶載裂の実態を窺う上で貴重である。

研究実績の概要（2）

研究期間と場所

- ・平成 25 年 6 月 16 日～6 月 18 日 長崎歴史文化博物館・長崎市出島史料館・孔子廟中国歴代博物館・松浦史料博物館・平戸オランダ商館にて舶載染織品の調査
- ・平成 25 年 8 月 8 日～8 月 9 日 もりおか歴史文化館にて南部家伝来染織品の調査